慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	共同體(Gemeinschaft)の概念
Sub Title	
Author	新舘, 正國(Niidate, Masakuni)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1940
Jtitle	哲學 No.21/22 (1940. 7) ,p.329- 384
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	川合博士古稀記念特輯
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000021-0329

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

共同體(Gemeinschaft)の概念

新館正國

本稿は昭和十五年一月二十六日三田哲學會公開講演會の席上で述べた講演の筆記に若干の補正を加へたものである。

一

共同體といふ言葉は、近頃廣く一般の耳目に觸れるやうになつた樣であります。しかし、この言葉は――從つて又この概念は、本來決してわれわれ日本人の頭腦から生れ出でたものではありません。勿論、例へば東亞共同體といふやうな概念の、直接の若しくは現實的な動機となつたものは、最近の日支關係を中心として展開された東亞の新事態であり、その把握の對象も亦其處に在るのであつて、一見すると、この概念はいかにも徹頭徹尾東亞的なもの若しくは日本的なものであるか

のやうにも思はれるのでありますが、この概念の概念的な基底をなすもの、卽ち共同體そのものの概念に到つては、意識的にしろ無意識的にしろ、われわれはこれをドイツから輸入し、若しくは密輸入してゐるのであります。この事實は、大體共同體といふ邦語からしてドイツ語のGemeinschaftの譯語であることを想ひ起せば、單に東亞共同體のみに止らず、わが國に於て一般的にしろ學問的にしろ苟しくも共同體の論議されるところでは、到る處に指摘され得る事實であることは云ふまでもないのであります。

斯やうな事情に在つてみれば、われわれが共同體の概念に由つて何等かの社會的な現實態を捉えやうとする場合、先づ注意しなくてはならないことは、この概念、卽ちGemeinschaftの概念が、その故郷ドイツに於て、果してわれわれ異國人が直ちに採つて以て範とするに足る程の優れた一義的な內容を持つてゐるかどうか、といふことでなければなりません。言ひ換へれば、其處に果して概念的な完結性が認め得るかどうか――若しもわれわれがこの詮策を怠つて、唯だ徒らにこの概念の吸收にのみ急ぐ時は、その誤謬若しくは不徹底性の模倣にまで陷る危險が無いと

云ひ得ないでありませう。

然るにGemeinschaftの概念は、その故郷に於きまして、特にドイツ的な概念としては旺んにその偉容を誇つてゐるのでありますが、不幸にして普遍妥當的な概念、即ち眞の概念としては未だ多分に彫琢の餘地を殘して居るのであります。

この事情の稍々詳細な內容に就ては後に改めて申述べるつもりでありますが、いまその一例を最近の事實にとつてみますに――今日Gemeinschaftの概念は、御承知のやうにナチ黨並に政府に依つて、盛んにその政策の指導原理の裡に採り入れられ、而かも彼等は其處に彼等の政治の獨自性、創造性の根源を强く求めてゐるのであります。即ち國民共同體 Volksgemeinschaftの概念はナチの世界觀の中心をなすものであり、經營共同體 Betriebsgemeinschaftの概念はナチの社會觀の核心をなしてゐるのであります。そしてこれらの共同體概念は、ナチの强權を背景として、今日全ドイツ國民の生活觀を壓倒的に支配し、又彼等の生活態度を强力に規定してゐるのであります。然るにナチは、斯くも偉容を誇る彼等の共同體概念に就て、その理念的な要求こそは高らかに掲げてゐるのでありますが、その具體的な內容に

到つては、凡ゆる彼等の努力にも拘らず、未だ多くの不徹底性、未完結性を殘してゐるのであります。例へばナチは、その國民共同體たると經營共同體たるとを問はず、凡べて彼等の所謂共同體には、「全の利益が個のそれに先行する」といふ性質を强く要求してゐるのでありますが、この性質が共同體の裡に具體化される爲には、全の利益と個のそれとの本質關係が明確に規定されなくてはならない筈であります。卽ち全と個との單なる先後の關係は、それらのものの本質關係にまで堀り下げられない限り、決して明確な具體性を帶びることは出來ないものでありませう。更に言ひ換れば、その先後關係を重要な特質とする共同體は、その本質關係が明らかにされない限り、概念的には成立し得ないとも云ひ得るのであります。然るにナチの指導者または理論家達のこの方面に對する檢討は未だ不充分の域を脫して居りません。いまこの事實をわれわれに最も簡明に示してくれるものとしては、彼等の所謂經營共同體の概念をここに擧げることが出來るでありませう。この概念は、ナチストに云はせますと、かの徹頭徹尾企業家と勞働者との、給付と反對給付との關係に終始する資本主義的な生產關係に對抗して、指導者と從者、Führer

と Gefolgschaft との、責任と信賴との關係を基底とする全體主義的な生產關係の基本形式を示すものでありますが、斯のやうな性質を帶びるべき筈の經營共同體が果して具體的に如何なる構造を持つのか――ナチは、その「國民勞働秩序法」(Gesetz zum Ordnung der nationalen Arbeit.) に於て、その性質に就てこそ種々理念的な要求を掲げて居りますが、その具體的な構造に就ては――就中その構造に於て全と個との關係上最も問題視されなくてはならない企業家と指導者との關係に就ては、何等明確な規定を示して居ないのであります。即ちナチは、經營共同體に就て、その斯くあるべき性質は、それらを斷片的に極めて强烈な調子で主張してゐるのでありますが、その本質的な全體的な構造に就ては、何等積極的な徹底的な主張を敢へて提出してゐないのであります。これをいま少しく具體的に云へば、經濟的企業の表現としての經營が、如何にして共同體化され得るか、ナチはこの共同體化の根源をその所謂指導者原理 Führersprinzip に指摘してゐるのでありますが、これは問題の解決であるよりは寧ろ問題の提出なのでありまして、この原理だけでは、企業家が同時に指導者となり得るのか、或は指導者と企業家とは全く別箇のものであ

るのか、若しさうとすれば經營共同體の內部に於ける兩者の關係はどうなるのか、言ひ換れば經營共同體といふ共同體は、これら兩者の如何なる關係の上に立つのか――斯やうな經營共同體の本質的な構造に就ては、ナチの指導者は未だ何等の明確な決定をも與へずに、これを彼等の理論家達の討議に委かせてゐるのであります。而かもこの討議に於ては、マンスフェルドのやうに企業家の機能から指導者の機能を導き出して、そこに權力の統一を認める一派があるかと思へば、又ディーッのやうに指導者に獨立の機能を認めて、權力の分立を强く主張する一派もあると云つた有樣なのであります。從つて彼等の一人(ディーッ)は、經營共同體を以て未だ「發展せざる統一體」と呼んでゐるのでありますが、これは同時にナチの凡ゆる共同體への標語とも見做され得るのであります。(*E. Pech*, Die Rechtsstellung des Unternehmers gegenüber der Führer des Betriebes, 1934. *E. Ballinger*, Die Rechtsstellung des Unternehmers, 1935. *F. Rössler*, Der Führer des Betriebes, 1935. *K. H. Olbrisch*, Die rechtliche Stellung des Betriebsführers nach dem AOG., 1935. *H. Lange*, Der Führer des Betriebes im Gesetz zur Ordnung der nationalen Arbeit, 1936. *E. Fechner*, Führertum und Unternehmertum

im Gesetz zur Ordnung der nationalen Arbeit, 1937.) では、何故にナチの指導者が經營共同體の本質的構造を示し得ないのか、又それに就て何故ナチの理論家達の見解が多岐に分れて、歸一しないのか――これには固より種々の理由が擧げられ得るでありませうが、その最も深い理論的原因は、實に共同體そのものの概念の不明瞭性に在ると云つて決して過言ではないのであります。

さてドイツに於てGemeinschaftの概念が、大體いま述べたやうな狀態に在るといたしますと、われわれがこの概念を使用する場合、それが故鄕で示してゐる偉容に徒らに眩惑されてその正體を見失ふと云つたやうな不注意が、嚴しく警戒されなくてはならないことは云ふまでもありません。わが國に於ける共同體の概念、殊に東亞共同體といふやうな時代の嚮導概念に於て、果していま指摘したやうな不注意が全くその跡を絕つてゐるかどうか、其處にドイツ的な不明瞭性若しくは不徹底性が完全に淸算されて、この概念が純日本的な概念として全く普遍妥當的な眞の概念にまで發展せしめられてゐるかどうか――この問題は極めて興味ある問題ではありますが、本日、私は直接これを一々吟味してゆく用意も餘裕も持つて

ないのであります。これから私の申述べてゆかうとするものは、寧ろ斯かる吟味の根底となるべきものでありまして、即ちGemeinschaftの概念が、その故郷ドイツに於て如何なる運命を荷負ひ、且つ如何なる内容を持つてゐるか――この概略を、時間の許す範圍内で纒めて申述べ、それに卑見の一端を附け加へてみたいと思ふのであります。斯やうな謂はゞ共同體理論研究の序文とも云ふべき事柄をここに申述べることも、この概念がわが國で漸く一般化せんとしつつある今日、強ち徒爾ではあるまいかと考へるのであります。

二

却説、まづドイツに於けるGemeinschaftの概念の運命に就てでありますが、これを正確に捉える爲には、豫めGemeinschaftといふ言葉の一般的な意味、即ちその語感（ヴォルトシン）を知つて置く必要があるのであります。蓋しこの概念のドイツ的な概念である所以の最も一般的な理由は、この言葉そのものの語感に在るからであります。

しかし、すべて外國語の語感を理解するといふことは、決して容易なことではあ

りません。否、その語感を在るがまゝに捉えることは寧ろ不可能に近い事柄でありまして、通常われわれは一外國語の語感を、それと類縁を持つた言葉との意味の上の相違、特に原義上の相違に由つて辛じて想像してゐるに過ぎないのであります。從つていまGemeinschaftの語感に就て申述べるに當りましても、これを、それと類縁を持つた言葉――此處ではGesellschaftといふ言葉を選びたいと思ひますが――この言葉との意味の上の相違を指摘することに依りまして、僅かに想像してみるの他はないのであります。

其處でまづGemeinschaftといふ言葉の意味でありますが、これは、テォドール・ガイガアの説明に從ひますと、すべてGemeinschaftとかGesellschaftとか、-schaftといふ語尾を持つドイツ語の通則といたしまして、具體的と抽象的との二つの意味を持つてゐるのでありまして、具體的にはGemeinschaftは「何ものかを全體として共有してゐる人々の總體」(die Gesamtheit derer, die etwas zu gesamter Hand gemeinsam haben)を意味してゐるのであります。この意味に於けるGemeinschaftは、グリムに從ひますと、その言葉の由來からみても又その往時に於ける用語例からみても、Gemeinde即

ち公共團體といふ言葉と全く同じ意味のものでありまして、これが更に轉用される場合には、Almende 卽ち公共財産そのものを云ひ現はす爲にも用ひられると謂はれて居ります。では、抽象的な意味に於てはどうかと申しますと、抽象的意味に於ける Gemeinschaft は「何ものかを全體として共有する場合に、その人々の間に成立する關係」(das Verhältnis, das zwischen Menschen besteht, sofern sie etwas zu gesamter Hand gemeinsam haben) を意味してゐるのであります。この意味に於ける Gemeinschaft は、法律用語となつて一般に知られるやうになつたのでありまして、Gütergemeinschaft, Vermögensgemeinschaft, Hausgemeinschaft などがその用法の一例であります。しかしこの抽象的意味に於ける Gemeinschaft は、後年に到りますと、物質的精神的そのいづれの根據に基くを問はず、一般に人間の結合關係を言ひ現はすのに用ひられて、Gesellschaft と殆んど異語同義(シノニム)に用ひられるやうになつたと謂はれて居ります。

では次に、この Gemeinschaft と極めて密接な類緣を持つた Gesellschaft といふ言葉の意味はどうかと申しますと、これ又テォドール・ガイガアの說明に從へば Gesellschaft は本來「空間的に一緒に生活する人々、若しくは一時的に同一の空間に結び合

つてゐる人々の全體」(der Inbegriff räumlich vereint lebender oder vorübergehend auf einem Raum vereinter Personen.)を意味してゐるのであります。即ちこの言葉は、語源的にみますと、遠くは恐らくラテン語のsolum(所有地、地所)といふ言葉と關係を持つものでありませうが、直接にはアルトホッホドイッチのsal(部屋)若しくはselide(住居)といふ言葉から出てゐるやうであります。從つて最も古くGesellen若しくはGesellschaftと呼ばれたものは、アルトゲルマンの君主に仕えた人々であつたのであり、彼等がさう呼ばれた所以は、君主と住居や食卓を共にしてゐたからなのであります。その後、同じやうな理由から、Gesellschaftは又客間に集つた賓客達をも意味するやうになつたのでありまして、この用法は今日もなほ盛んに使はれ續けて居るわけであります。即ち客を招いて接待するといふ意味のeine Gesellschaft gebenとか、席を共にするといふ意味のjemand Gesellschaft leistenとかいふのは、いづれもその一例を示すものでありませう。更に、古くから手工業者の間に用ひられてゐるGesellen(職人、徒弟)といふ言葉にも、「主人若しくは親方と彼の工房で空間的に一緒に成つて仕事をする」といふ同じやうな空間的な意味がその根底となつてゐる

のであります。然るに Gesellschaft といふ言葉は、中世紀の終り頃から從來の空間的意味を中心とした原義から離れ始めて、凡ゆる種類の集合または結合を意味するやうになり、遂ひには全く抽象的に、Gemeinschaft のそれと同樣に、一般に人間の結合關係を意味するやうになつたと謂はれて居ります。(以上に述べた Gemeinschaft と Gesellschaft との語義に關するテォドール・ガイガアの說明は、次の書物に見えて居ります——Handwörterbuch der Soziologie, herausgegeben von Alfred Vierkandt, 1931. S. 173 u. 202.)

斯やうに Gemeinschaft と Gesellschaft といふ、これら二つの言葉は、全く別々の語源または原義から出發してゐながら、夫々の抽象的な意味に於ては一應略々一つの意味に合流してゐるのであります。從つてその一つの意味、卽ち一般に人間の結合關係といふ一つの事柄に對して、これら二つの言葉が激しく混用されるやうになつたことは、固より避け難い事情に在つたのであり、これが一般的な趨勢ともなつたのでありますが、では、その混用に於てこれら二つの言葉は、單にそれらの文字面に於ける表面的な特殊性のみを殘して、全く夫々の個性を根底から失ひ果てて

ゐるかと申しますに、これは必しもさうではないのであります。即ちこれら二つの言葉は、一應一つの場所、即ち人間の結合關係といふ一つの場所では合流してゐながらも、その場所の内部ではお互ひに各自本來の方向を失つてゐない流れを見せてゐるのであります。從つて同じ人間の結合關係でありながら、例へば商事會社や株式會社は、Handelsgesellschaft, Aktiengesellschaft と呼ばれて決して Handelsgemeinschaft, Aktiengemeinschaft とは云はれません。それに反して結婚生活は、Gemeinschaft des Lebens とは云はれますが、これを Gesellschaft des Lebens と呼ぶことは許されて居りません。また夫婦の間の Gütergemeinschaft を Gütergesellschaft といふ言葉に置き換へることは出來ず、子供達は、schlechte Gesellschaft に近寄つてはならないと誡められますが、この場合に schlechte Gemeinschaft といふ言葉は使はれません。斯やうな例はこの他にも數多く指摘され得るのでありますが、此處にわれわれは、これら二つの言葉の微妙な、しかし根強い語感を感得すべきであらうと思はれるのであります。しかしこの語感が直ちに、テンニースの指摘してゐるやうに、Gemeinschaft は溫い永續的な内面的な共同生活であり Gesellschaft は冷たい一時的な

外面的なそれであるといふやうな明確な概念的の色調（ニュアンス）を帶びてゐるかどうか（F. Tönnies, Gemeinschaft und Gesellschaft 6. u 7. Auflage, 1926. S. 1—5.）は俄かに決定し得ないと思ひますが、其處には二つの言葉の原義が復活せられ、またそれが根底となつて、概念的な色調（ニュアンス）ほど明確ではないにしろ、一層多彩に一層奥深くこれら二つの言葉の根強い個性を浮彫りにする純感情的な色調（ニュアンス）が盛りあげられてゐるのではないかと思はれるのであります。即ち等しく人間の結合關係を意味しながらも、Gemeinschaft は何等かの全體的な共有物を基礎とした人間の結合關係、Gesellschaft は何等かの環境的な空間を契機とした人間の結合關係といふ、これらの言葉の原義が、再びこれらの言葉に由つて捉へられた人間の結合關係に微妙な、しかし根強い相異を際立たせて、其處に人々の好惡の念をすら喚び起してゐるのではないかと思はれるのであります。テンニースの指摘したやうな概念的な色調（ニュアンス）は、寧ろ斯うして醸し出された感情的な色調（ニュアンス）の概念的に硬化されたものと見らるべきでありませう。

斯やうに解釋して參りますと、Gemeinschaft といふ言葉に對するドイツ人の偏

愛の根據が朧ろげながらにも理解されて來るやうであります。即ち本來ドイツ人はGemeinschaftとGesellschaftといふ言葉に、最初からテンニースの云ふやうな概念的な差別を感じてゐたのではありませんが、人間の結合關係の内に在つて特にGemeinschaftといふ言葉に由つて捉へられる一つの關係に異常な關心と愛着の念を持つてゐたし、また持ち續けてゐるのであります。その關係こそは、精神と血と土との共有に基く人間の結合關係であり、所謂Volksgemeinschaftといふ言葉に由つて最もよくその特性を捉へられてゐるところの人間の結合關係なのであります。今日Volksgemeinschaftと云へば、全くナチの獨創物若しくは專賣物のやうに思はれる人があるかも知れませんが、ナチは寧ろ古くからこの言葉のドイツ人一般に對して持つ奥深い魅力を巧みに利用してゐるに過ぎないのでありまして、Volksgemeinschaftに對する偏執若しくは偏愛は、實はドイツ國民生活の古今を貫く一つの歴史的な國民的性格であると云つていいのであります。これをいま極大握みにいたしますならば――御承知のやうにドイツ人は、アルトゲルマンの昔から今日に到るまで幾度か彼等の惠まれない環境との死闘を繰返して參りました。彼等の

不毛な生活地、襲ひかゝる逞しい外敵、その外敵の征服がやがて彼等の裡に捲き起した種々な内部的の分裂、爭鬪、更に機械的生產の時代に於ける原料の不足と販路梗塞など……これらの致命的な環境の壓迫を、しかしドイツ人は常に屈することなく反撥し續けて、彼等の生活を今日に持續し發展させて來たのであります。ドイツ國民の歷史は、確かに一面からみれば、斯やうな環境への反撥の歷史であつたと云ふことが出來るでありませう。では、この彼等の運命開拓の鍵となつた不屈の反撥力の源泉は何處に在つたか――これは、ドイツ人としては考へまいとしても考へずにはゐられない彼等の歷史の課題であります。そしてこの課題の解答に當つて彼等が、彼等自身の優秀な軍事的能力や卓越せる技術的才能等の一切の現實的な反撥力の源泉として、彼等の强靱なる團結力、更にその根底としての彼等の精神と血と土との共有に基く結合關係、卽ち彼等の Volksgemeinschaft にいかに異常な關心と愛着の念とを寄せてゐるか。これは、かつてゴビノーやチェンバーレンの人種論やリシャルト・ヴァグナァの藝術が彼等の熱狂的な支持を得た一事を顧みても明らかに看取されるところでありまして、この精神的な態度は寧ろ彼等

の歴史的な必然性を帶びた國民的性格であると云つていいと思はれるのであります。そしてこの歴史的な具體的なVolksgemeinschaftに對する異常な關心と愛着の念とが、やがて廣くGemeinschaftそのものに對するドイツ人の偏愛を惹き起したのではないかと考へられるのであります。即ち一般にドイツ人にとつて環境は暗いもの、それは絶へず闘爭を挑まねばならぬ邪魔なもの、從つて斯うした環境に基いて生滅するGesellschaftは、たより無いもの、便宜的な一時的な外面的なものであり、斯うした環境の暗闇に光を投げ込むものこそ彼等の本質的な永續的な内面的な團結、即ちGemeinschaftであるといふ考へは、全く彼等のVolksgemeinschaftに對する歴史的な具體的な關心から流れ出てゐるものと考へられるのであります。

斯やうにみて參りますと、Gemeinschaftといふ言葉が、極めてドイツ的な、即ちドイツ國民生活の歴史を背景とした極めて根強い具體的な語感を持つてゐることがわれわれにも稍々理解されて來るのであります。Gemeinschaftの概念は、實に斯やうなこの言葉そのものの持つ一般的な意味、即ちその語感の上に成長してゐるのでありまして、ドイツに於けるGemeinschaftの概念の運命は、この概念に對する純

學問的な檢討、論議に由るよりは寧ろこの語感に由つて、一層强く又多く決定されてゐるのであります。從つてGemeinschaftの概念に於ける眞の問題性は、これを次のやうに指摘することが出來るでありませう。卽ちGemeinschaftといふ言葉の持つ語感は、ドイツ國民生活の歷史にとつてこそ深い眞實感を帶びたものであるかも知れないが、しかしその眞實感を廣く人間そのものの結合關係の上にまで擴張しやうとする時、果してGemeinschaftといふ言葉が眞の概念性を獲得し得るや否や、其處にドイツ的な偏狹性が却つて眞の人間的結合關係に對する概念的檢討の進路を阻害してゐるやうなことが無いかどうか。われわれは次に、Gemeinschaftの概念の運命を辿りながら、その內容に立ち入つて少しくこれを吟味してゆきたいと思ふのであります。

三

さて茲にドイツに於けるGemeinschaftの概念の運命を概觀するに當りまして、豫めお斷りして置きたいことは、ドイツの學問界に於てこの概念が單に具體的な人

間的結合關係を對象とする社會學的な概念としてのみでなくまた抽象的な單なる結合關係一般を對象とする認識論的又は存在論的な概念としてもカント以來若干の歴史を持つゐるといふことであります。が後者に於てGemeinschaftといふ言葉は最も一般的な抽象的な意味にしか使はれて居らず、また後者は前者に直接にはなんの關係もありませんので、此處にはそれに就ての考察は一切省略させて貰ふことにいたします。

さてドイツに於てGemeinschaftといふ言葉が初めて、廣く人間そのものの結合關係の一種類若しくは一範疇としての概念性を獲得したのは、シュライエルマッヒャアの「社會的行動論の研究」(Schleiermacher, Versuch einer Theorie des geselligen Betragens, 1799.)といふ書物に於てであります。この場合にGemeinschaftの概念化が、Gesellschaftのそれと平行して行はれてゐることは、この二つの言葉の慣用に基いたドイツ的な現象でありまして、その後の概念化も亦この範圍を逸脱してはゐないのであります。では、この二つのものを先づシュライエルマッヒャアが如何にみたかと申しますと、彼に從へばGemeinschaftは一つの共有物若しくは一つの客觀

的な目的に由つて結合され且つ規定されてゐるところの人間の結合關係であり、從つてGemeinschaftに於ては外面的なもの、客觀的なものがその中心となつてゐるのでありますが、これに對してGesellschaftは客觀的にではなく、自由に(ここに自由にといふのは單に目的から離れてといふ意味に過ぎませんが)自由に結合された人間關係であり、從つてそれは相互性(Wechselseitigkeit)とか相互作用(Wechselwirkung)と謂はれる純主觀的關係に基礎を置く結合關係なのであります。このシュライエルマッヒャアの最初の試論は、充分により以上の學問的な檢討に堪え得るものであつたと思はれるのでありますが、當時この區別は何等の反響をも喚び起すに到らず、彼一人のみで立ち消えて了ひました。その原因は何處に在つたかと申しますに、學問的には當時ドイツの學界が未だ社會學的な興味に眼醒めてゐなかつたことなどその決定的な原因であつたとも思はれるのでありますが、一般的には就中次の事實をその最も根本的な原因として指摘し得ると思ふのであります。即ちシュライエルマッヒャアはGemeinschaftの概念を專ら法律用語としてのGemeinschaftの意味から導き出して、この言葉の國民的な意味には觸れなかつた、從

つてそのGemeinschaftとGesellschaftとの對立が一般的には單なる抽象性に終つて何等の具體性をも帶びることが出來なかつた――この點に彼のGemeinschaftの概念が一般の注目を惹くに到らなかつた最も大きな原因が在つたと私は思ふのであります。

シュライエルマッヒャアに次いで、GemeinschaftとGesellschaftとの兩概念の裡に人間的結合關係の二つの根本形式を區別した人は、彼よりも約一世紀後の人フェルディナンド・テンニースであります。テンニースの見解は、シュライエルマッヒャアのそれとは何等の關係もなく、寧ろその理論の結果からみますと部分的には全く正反對の結論に達してゐる程で、全く彼獨自のものであります。而かも彼は、その獨自のGemeinschaft論に於て、よくこの言葉の國民的な意味を概念的に發展させて、眞にドイツ的な社會學概念としてのGemeinschaftの概念を展開したのであります。そしてこの彼獨自のGemeinschaft論は、シュライエルマッヒャアのそれとは全く逆に、惠まれ過ぎる程の惠まれた運命に便乘して、以後一九三三年まで十數年間のドイツ社會學の發展の礎となると共に、一般的にもGemeinschaftと云へば直ち

に彼の解釋が思ひ出される程に極めて强大な影響を殘したのであります。

しかしいまテンニースのGemeinschaftの概念の內容に立ち入るに先立つて、私はその概念の運命を稍々詳細に亘つて申し述べて置かなくてはなりません。何故ならばドイツに於けるGemeinschaftの概念の運命は、實はテンニースのそれを中心とし、若しくは實體としてゐるからであります。而かも私はいま、テンニースのGemeinschaft論が惠まれ過ぎる程の惠まれた運命に便乘したと申し上げて置きました。次にこの評價の線に沿つて、少しくその運命を明らかにしたいと思ふのであります。

さて先づ極めて外面的な現はれから申し上げるならば——テンニースが彼のGemeinschaft論を初めて組織的に論述した劃期的な名著Gemeinschaft und Gesellschaftの第一版が公けにされたのは、既に前世紀の末の頃、卽ち一八八七年のことでありましたが、その第二版が世に出ましたのは、漸く今世紀の十年代、卽ち一九一二年のことでありました。卽ちその間には約四分の一世紀の歲月が經過してゐるのであります。然るにこの書物の最終版は、一九三五年に第八版となつて出版されて

居ります。これを通觀してみますと、前半の四分の一世紀の間には僅かに一版しか讀まれなかつたのに、後半の約四分の一世紀の間にはこれが七版も讀まれてゐるといふ奇妙な現象がここに指摘され得るのであります。而かも斯やうに"Gemeinschaft und Gesellschaft"は、その出版後二十五年間も增刷の機會に惠まれなかつたばかりではありません。その間テンニースが特に期待してゐたにも拘らず、この書物は學者の側から殆んど問題とすべき批評を受けてゐなかつたのであります。彼の所說が、或はヘフディングに由つて社會的悲觀主義 sozialer Pessimismus の刻印を捺され、或はパウル・バルトに由つて仄かな浪曼主義 eine leise Romantik の烙印を押されて學界の一隅にその存在を知られて來たのは、漸く一九二〇年代のことでありまして、而かもこの同じ一九二〇年代には、彼の Gemeinschaft 論を發展させてドイツ社會學の最盛期を招來したフィアカント、シュタウジンガア、メッツガア、シュマーレンバッハ、テォドール・ガイガア等の勞作が世に現れてゐるのであります。

以上に指摘した事實は何を物語るものかと申しますに、これは疑ひもなくテン

ニースのGemeinschaft論が單にそれ自身の力に由つて、卽ちその理論的な迫力に由つてのみ壓倒的に一般にも學界にも受けられたのではないといふ事情を明白に物語つてゐるとみて差支えないと私は思ひます。後程稍々詳しく觸れたいと思ひますが、テンニースのGemeinschaft論は決して理論的に完成されたものではありません。寧ろその學問的な理論的な價値は、それが包括してゐる問題の深さ、また廣さに在ると云つていいのであります。從つてその問題論が學界の注目を惹かない限り、テンニースのGemeinschaft論も亦、當然シュライエルマッヒャアのそれと同一の運命を辿るべきではなかつたかと考へられるのであります。では、テンニースのGemeinschaft論が如何にして學界の注目を惹くに到つたかと申しますに、これには種々の原因もありませうが、その最も一般的な根本的な原因としては、內面的な、學界に於ける社會學的興味の昂進といふ事實よりは、寧ろ第一次ヨーロッパ大戰後のドイツに於ける舊社會秩序の崩壞と新社會秩序の建設と謂ふ外面的な時代の大轉廻が指摘されねばならぬと私は思ひます。卽ちこの時代の强大な課題がドイツの政治に經濟に文化に種々樣々の動搖やら變革を齎らした事情に就

ては、それをここに一々說くわけには參りませんし、又いまはその必要もないと思ひますが、この社會の大轉廻時代が學問に對しては社會に關する徹底的な包括的な統一的認識を要求した事實は、テンニースのGemeinschaft論にとつてその運命の十字路を劃したものであつたと私は考へるのであります。大體ドイツの社會學は、古くはシェッフレ、グムプロウィッ、ラッツェンホーファ等の體系を殘してゐるのでありますが、今世紀の初頭にジムメルが現はれましてからは體系よりは方法の問題が研究の主流を成してゐたと云ひ得るのであります。この社會學の方法への沈潛期に社會の統一的認識の舞臺を殆んど獨占してゐたのはマルクス主義の社會論でありました。しかしマルクス主義の社會論は、その戰鬪的なイデオロギイに基いて、自ら理論よりは實踐の渦中へ身を投じて、轉廻期に光明を與へるよりは寧ろ不安を激成するばかりであつたので、時代の社會認識への要求は彼等の上を去つて、より深くより廣く學問の領域にその充足を求めたのであります。當時のドイツの社會學界に於て、マルクス主義の社會論を乘越えて、この時代的な要求に應え得るものはテンニースの體系を措いては他になかつたのであります。

"Gemeinschaft und Gesellschaft"の第一版及び第二版の序文に於て、テンニースはマルクスの見解に就てその注目に値ひする點を三つ列擧して居ります。即ち第一は自由主義が正常なものと認めてゐる社會狀態が、それ以前の文化には存在せず、而かもその文化は繁榮を迎えて居り、私有財產制の代りに共有財產制が尠くとも土地に就ては行はれてゐたといふ主張、第二は、現在の資本主義的社會も堅固な結晶體ではなく、不斷の變化の裡に在る有機體であるといふ主張、第三は、政治的關係や精神的關係が社會の運動の原動力ではなくして、日常の經濟生活に於ける粗野な物質的欲望や感情がそれであるといふ主張であります。斯のやうにテンニースは、マルクスに敎へられるところが在つたにも拘らずその體系的見解に於ては、マルクスのたてこもる所謂 bürgerliche Gesellschaft を乘越えて、社會の全貌を Gemeinschaft と Gesellschaft との對立、相反に於て捉えたのであります。斯のやうに彼以外の社會學者が社會を切るのに先づその劒を研ぐのに沒頭してゐた時、テンニースはひとり昂然と新鋭の劒をかざして直接社會に切りつけてゐたとでも申しませうか。その劒尖は未だ社會の心臟に奧深く達することは出來なかつたかも知れま

せんが、確かにその心臓を目がけては切り込んで居たのであります。彼の體系が、當時俄かにドイツ社會學界の注目を浴びるに到つたことは、寧ろ當然であつたでありませう。テンニース自らその主著の第六及び七版の序文(一九二五年)で、「この書物が三年前に二千部新たに公刊されて以來、ドイツの社會學はGemeinschaftとGesellschaftなる概念を、或は承認肯定的に、或は批判的、稀には否定的に取扱へる數多の著作によつて豐富にされた」と云つて、オッペンハイマア、フィアカント、シュマーレンバッハ、イエルサレム、ザウアー、クラカウアー、ローゼンシトック等の著書を指摘してゐるのであります。

しかし以上に申し述べたテンニースのGemeinschaft論の學界に於ける運命は、惠まれてゐたとは云へませうが、未だ惠まれ過ぎてゐたとは云へません。何故ならばこの場合、たとへ第一次ヨーロッパ大戰といふやうな外面的な好機があつたにしろ、彼の體系的見解が學界に認められた原動力は、それ自身の力、即ちその理論的な迫力に在つたからであります。從つてそれは當然な好運であつて、不當な好運即ち惠まれ過ぎた好運ではありません。

然るにテンニースのGemeinschaft論は、この當然な好運に行き遇ふ前に、既にそれ自身の全く期待もせず、況んや希望もしなかつた方面から意外の反響を呼んで、一世の注目を浴びてゐたのであります。そこでは彼の見解が唯だ感情的に最後の眞實或は非眞實として囂々たる贊否の渦中に捲込まれて了つたのであります。では、テンニースのGemeinschaft論の、この不當な一般化、大衆化に口火を點けたものは何かと申しますに、それは今世紀の初頭にドイツを風靡した青年運動 Jugendbewegung であつたのであります。

この青年運動は――既に御承知の方が多いかと思ひますので、極く大雜把に申しますと――當時のブチブル階級及び特に彼等の子弟たる青年インテリ層の間に起つた一つの文化批判、社會批判の運動であります。彼等は、十九世紀の所謂個人主義的な機械主義的なブルヂョア文明に倦怠を催し嫌惡を感じては居りましたが、それかと云つて新興の勞働者農民階級に由る社會革命にも反感を抱き憎惡を感じて居りました。斯うした中間的立場に追ひ詰められた彼等が猛然と上下から襲ひかゝる壓迫を反撥して、公然と彼等の不滿や憤懣を一つの文化批判、社會批

判の運動にまで發展せしめることの出來たのは、ドイツに於ける青年インテリ層またはブチブル階級の强大な社會的勢力を裏書きするものでありませう。彼等は、その批判に於て、原理的には社會生活の唯物主義的な原子化若しくは機械化を排斥し、更に理性の機能、特にその時代に對する積極的な若しくは急進的な運動をも否定して、急角度に非合理主義または感覺主義に歸依して行きました。特に合理主義的な學校教育は彼等に由つて生命から遊離せるものとして激しく非難され、自由と友愛とに護られた natürlich-jugendliche Lebensform が熱狂的に追求されました。ヴァンダァフォーゲル、ラガァの生活、民族的な舞踊や歌謠の稽古、natürlich-jugendliche な着衣等――これらに由つて彼等はその文化意志を表現しやうといたしました。彼等は事實や理性の世界に背を向けて、ひたむきに精神や血や土の世界へ突進し、其處にドイツ青年の力强い更生を求めたのでありました。從つて社會的には、多岐複雜な組織を持つ大集團生活や現實的な唯物的な目的に仕える結社生活に反抗して、彼等は天惠的な charisma 的な指導の下に在る單純な素直な愛情に由る結合を無上に尊んだのであります。一九一三年の十月に Meissner の

丘で催された青年祭（ユーゲントフェスト）は、彼等の運動の絶頂を飾るものでありました。（この青年運動に就いてその詳細を知りたい方には、Herrle, Die deutsche Jugend in ihren kulturellen Zusammenhängen, 3. Aufl., 1924. をお奬めいたします。）

斯のやうな浪曼主義的な文明悲觀主義者の群が、テンニースのGemeinschaft論に先づ異常な關心を寄せたのであります。即ち彼等は、何等の反省も加へる餘裕なく、寧ろ熱狂的な偏愛を以て、テンニースの體系に現はれたGemeinschaftとGesellschaftとのアンチテーゼを窮極的な本源的な社會形式と認めて、これを直ちに彼等の運動の實際に活用したのであります。「ゲマインシャフトへかへれ！」Zurück zur Gemeinschaft！彼等の旗印には斯うしるされました。斯くてGemeinschaftの概念は、質實な若しくは客觀的な社會學概念から一つの文化的社會的運動の合言葉に變質されまして、俄かに一世の注目を浴びるに到つたのであります。即ち青年運動及びこれに由つて強く影響された教育學、更には當時の凡ゆる傾向の國民主義的な運動に於て、Gemeinschaftは十九世紀のブルジョア文明と二十世紀のプロレタリア運動とに對するKampfrufとなつて、全ドイツの同感と反感とを買ふに到

つたのであります。斯くてGemeinschaftの概念は、全く獨自なドイツ(ドイッチェア・プロブレム)の問題となつた(テオドール・ガイガァ)のであります。即ち以後ドイッの凡ゆる社會運動、政治運動、文化運動は、一面からみると全くGemeinschaftの概念に對する同感と反感との間を右往左往したと云へるのであります。先づその反感者の陣營を見渡してみますと、そこには國際主義的な色彩の濃い、マルクス主義的な勞働組合と政黨、新即物主義運動 neusachliche Bewegung の支持者、舊教信徒などの横顔がクローズアップされてくるのでありますが、しかし今日のドイッの社會、政治、文化の諸領域から彼等の横顔の全く消え去つてゐることは既に御承知の通りであります。即ち彼等は、Gemeinschaftの概念を中心として展開された社會闘爭、政治闘爭、文化闘爭に於て、この概念を旗印とする國民主義者の群のために一敗地に塗みれて了つたのであります。何がこの彼等の慘憺たる敗北を持ち來たしたのか。その原因としては通常、大戰後のドイッに於ける窮迫せる經濟狀態、混沌として歸趨の定まらなかつた政治事情などが指摘されて居りますが、私はそれらに加へて、否、寧ろそれらよりも一層深い原因として、ドイッに於けるプチブル階級の社會政治的文化的勢力の强

大さと、更にGemeinschaftといふ概念ではなしに言葉そのものの持つ國民的な意味の深さを指摘したいと思ふのであります。前者に就ては、いまそれに一歩立ち入つて詮策する餘裕を持ちませんが、後者に就ては、前に申し述べて置いたGemeinschaftの國民的歴史的な語感を此處に再び想ひ起して貰ひたいと思ひます。大體テンニースのGemeinschaftの概念は、彼自身も認めてゐるやうに(Gemeinschaft und Gesellschaft, 7 u. 8 Aufl., 1926. S. 3——5.)この言葉の國民的な語感から導き出されたものでありますが、しかし其處には勿論この言葉の持つ單なるドイツ的な眞實感に普遍妥當的な概念性を附與しやうとする彼の純學問的な努力の跡が意味深く積みねられて行つたのであります。然るにこれが一度青年運動の手を通じて「ドイツの問題」になると、却つてこの概念の學問性は、惡化し行く經濟狀態、政治事情の進行と共に、本來の語感に由つて浪曼化され、國民化されて行つたのであります。前に私は環境の壓迫を團結力に由つて反撥することがドイツ人の國民的性格であることを注意して置きました。大戰後の困難な經濟狀態、政治事情に直面した時、ドイツ人は先づ身近かな派閥的團結力に由つてこれを反撥しやうといたしま

した。しかしその派閥的な團結力が經濟的政治的困難の重壓に堪えられなくなると、そこに全體的な團結力の再編成が必要とされて來ました。ドイツ人には本來の語感に於ける Gemeinschaft が切實に想ひ起されて來たに違ひありません。Gemeinschaft の概念の浪曼化、國民化は、斯うしたドイツ人の心情を背景として行はれたのであります。而かもこの心情は、經濟的政治的困難の深刻化と共に國民主義者と呼ばれるプチブル階級の一角から徐々に、或は急激に全ドイツ人の胸裡へひろがつて行きました。斯くて Gemeinschaft の概念は、その根強い語感を通じて、大多數のドイツ人の世界觀社會觀の內に强靱な根を張つて行つたのであり、これがナチの所謂「ドイツの國民革命」の最も强固な地盤と成つたのであります。

以上が大體テンニースの Gemeinschaft の概念の運命に就て、私が惠まれ過ぎた好運と呼んだ側面であります。しかし惠まれ過ぎた好運が常に必しも幸福を齎らさず、却つて屢々不幸の出發點となることは、人生普通の經驗の示すところであります。テンニースの Gemeinschaft 論も、この側面に於ては不必要な迄に有名にもな

り、又不必要な迄に多くの信奉者を集めました。しかし其處では、本來體系的に理解されねばならぬ彼の見解が、部分部分に寸斷されて、徒らに過剰な感動を喚び起して居り、冷靜なるべき理論が熱烈な信仰に化して居ります。斯やうなことは、本來のGemeinschaft論にとつて、決して名譽でもなければ幸福でもありません。その實證は今日のドイツに於て既にまざまざと現れてゐるのであります。本來のGemeinschaft論は、Gemeinschaftの概念が大衆的確信となり信仰となればなる程、極力それ自身の完成に努めて、大衆の確信的行動を單なる狂信的偏執的行動に終らせないやうに指導する切迫した實踐的使命をすら課せらるべきが至當でありませう。然るに今日のドイツに於ては、テンニース以後に於けるGemeinschaft論の學問的發展の道はふさがれて了つてゐるのであります。これは、勢ひの激するところ信仰としてのGemeinschaftが理論としてのGemeinschaftを虐殺して了つたとでも云ひませうか。ナチのVolksgemeinschaftの信念は、Gemeinschaftの理論的研究を現實的にも理念的にも不可能に陷れてゐるのであります。かつてテンニースのGemeinschaft論にひそむ問題論に着實な理論的檢討の眼を向けた學者達は、いまや講

壇からも論壇からもその姿をかき消されて了ひました。彼等の檢討は、Volksgemeinschaft にとつてもはや不必要であるばかりでなく、寧ろ有害であるからであります。では、ナチの所謂 Volksgemeinschaft は如何なる意味内容を持つてゐるかと申しますに、これに就てのナチの理論家達 (Adolf Hitler, Reden, 1933; Die Reden am Parteitag der Freiheit, 14. Aufl., 1936. Reinhard Höhn, Das Wesen der Gemeinschaft, 1936. Andreas Pfenning, Gemeinschaft und Staatswissenschaft, Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft 96. Bd., 2. Heft) に共通の見解を拾つてみますと次のやうになります。即ち Volksgemeinschaft は本能的であり、自然的であり、超個人的であり、超理性的である。それは Volksleben から迸り出たものである。斯やうな Leben は、偏狭な個人的理性の到底理解することの出來ないものであり、唯だ Leben は Leben のみがこれをよく理解することの出來るものである。而して生きるといふことは、意志し感情すること、即ち行動することに他ならない。行動のみが、Volksgemeinschaft の本質を明らかにすることが出來る ——と、大體斯う云ふのであります。從つてヒトラアは「われわれの求めるものは、眞理ではなくして、行動である」とも云つて居ります。又ゾムバ

ルトは、行動性はゲルマン民族の特性であると見做して、この角度からナチの行動の理論を支持して居ります。斯やうにナチのVolksgemeinschaftの理論は、實は理論の普遍妥當性ではなくして、行動による理論の否定を根底として居るのでありまして、斯やうな主張の支配下に在つては、Gemeinschaftの概念の理論的檢討が全く不可能に陷ることは固より當然の次第でありませう。從つて初めに擧げて置いたBetriebsgemeinschaftの本質的構造の未完性も、更にはVolksgemeinschaftそのものの、それも、ナチストに云はせれば、共同體概念の不明瞭性の反映ではなく、行動の不足の結果であるといふことになりませう。しかし行動による理論の否定は、理論の否定の否定へと立ち向ふ必然性を持つことをわれわれは忘れることが出來ません。即ち行動による理論の否定は、その否定を再び行動による理論の生産にまで徹底しない限り、完結するものではありません。從つて所謂行動の不足とはこれを正確に解釋すれば、新しき理論の未生産を告白するものに過ぎず、そこに共同體概念の不明瞭性を指摘したからと云つて何等の背理でもないのであります。では、共同體概念の從來の理論的檢討を拒否したナチが、その行動の進展に由つて、如

何なる共同體概念を生産するか。これは未だ全く明日の問題なのであります。

四

以上、テンニースのGemeinschaftの概念に就て、先づその學界的な及び一般的な運命を粗略ながら語り終へたのでありますが、これを述べる最初に私は、ドイツに於けるGemeinschaftの概念の運命がこのテンニースのそれを中心とし、若しくは實體としてゐる旨を注意して置いたのでありました。然るにいま進んでテンニースのGemeinschaftの概念そのものの内容を申述べるに當つても、これと同樣な事實が先づ其處に指摘され得るのであります。即ちドイツに於けるGemeinschaft論は、實はテンニースのそれを中心とし且つ實體としてゐるのであります。いま少し具體的に云へば、ドイツに於ける凡ゆるGemeinschaft論は、テンニースのそれの問題論の上に立つて、それを補全し、超克してゐるのであります。例へばシュタウジンガアが、テンニーヌのGemeinschaft論を、その意志主義的な根據から解放して客觀主義的に基礎付け、且つ Gemeinschaft と Gesellschaft を第三の範型（Typus）たる支配の

範型に由つて補全しやうと努めたり Staudinger, Kulturgrundlagen der Politik, 1914、またシュマーレンバッハがマックス・ウェバアの影響下に Gemeinschaft を傳統的、Gesellschaft を合理的と解すると共にこれらを更に天惠的な Charisma 的な Bund の範型に由つて補全しやうとした (Schmalenbach, Die Kategorie desBundes, in Dioskuren, Band 1, S. 35—105.) が如き、更にフィアカントやテオドール・ガイガアが Gemeinschaft 論の所謂現象學的把握に於いて、テンニースのそれを乘越えた時に、もはや單なる Gemeinschaft と Gesellschaft との對概念の使用は止めてゐる (Vierkandt, Gesellschaftslehre, 1. Aufl., 1923. S. 179—294 ; 2. Aufl., 1928. S. 208—319. Th. Geiger, Die Gruppe und die Kategorien Gemeinschaft und Gesellschaft, in Arch. f. Soz-Wiss. u, Soz-Pol., Bd. 58.) が如き、その補全に於ても、超克に於ても、ドイツに於ける Gemeinschaft 論は、それが Gemeinschaft 論たるに止まる限り、テンニースのそれを中心とし、且つ實體としてゐるのであります。從つてテンニースの Gemeinschaft 論の內容を述べることは、丁度その運命が同時にドイツ的であつたのと同樣に、廣くドイツに於ける Gemeinschaft 論の眞髓を物語るものと云つて敢へて過言ではないのであります。卽ち其處では、ドイツに

於けるGemeinschaftの概念の長所と、また同時に短所とが最も典型的な表現をとつて居るのであります。この意味に於て私は、次にテンニースのGemeinschaft論の梗概を申述べて、この講演を終りたいと思ふのでありますが、御承知のやうにテンニースのGemeinschaft論は、その細部は兎に角、その梗概は既に廣く知れ亘つて居りますので、それを此處に繰返すに當つては、主として其處に如何なる短所が潜んでゐるか――その最も根本的な短所を中心としてお話を進めたいと思ふのであります。

では、先づテンニースが社會學的概念としてのGemeinschaftを如何に見たかと云ふに、これには社會の構造的範疇としてのGemeinschaftとその運動的範疇としてのGemeinschaftとの二方面の在ることは既に御承知の通りであります。

從つて第一に構造的範疇としてのGemeinschaftに就てその理論の概容を思ひ浮べてみますに、テンニースは人間の結合關係を意志的な關係とみて、意志の二種類に從つてその關係構造の範疇卽ちGemeinschaftとGesellschaftとの兩概念を確立し

て居ります。即ち彼は本質意志 Wesenwille の支配するすべての種類の結合を Gemeinschaft、選擇意志 Kürwille に由つて形造られ又は本質的に條件付けられたすべての結合を Gesellschaft と呼んだのでありますが、では、そこに本質意志と謂ひ選擇意志と謂はれてゐるものは何かと云ふに、それらは彼の主著の中に次のやうに定義付けられて居ります――「本質意志は、人間の肉體に對する心理的な對應物であり、Leben の統一の原理である……それは、丁度身體が大腦の細胞を包括してゐるやうに、思惟を包含してゐる。」これに對して「選擇意志は、思惟そのものの構成物である。從つてそれは思惟の主體へ關係付けられた場合にのみ、固有の現實性を獲得する。」(ditto, S. 85—86.) と、斯う說かれて居ります。說明並に引用は甚だ簡單ではありますが、此處では斯うした基本的見解の上にテンニースの構造的範疇としての Gemeinschaft の概念が展開されてゐることを想ひ起して貰へば充分なのであります。そして私はこの最も基礎的な根底に於て、テンニースの Gemeinschaft の概念がドイツ的な特性を帶びてゐること、そしてこの特性がその概念の透徹性を妨げてゐること、換言すれば其處ではドイツ的な眞實感が決して普遍的な妥當性

を獲得してゐないことを指摘したいと思ふのであります。

では、先づテンニースのGemeinschaftの概念に於けるドイツ的な特性とは何か。それは既に云ふまでもなくGemeinschaftのGesellschaftに對する根源性若しくは優越性の主張であります。テンニースはこの彼のGemeinschaft論のドイツ的な特性の學問的基底として、彼の意志論を提出してゐるのであります。即ち彼は、それ自身の裡に思惟を包含する本質意志が思惟の構成物たる選擇意志に先行し且つその根源たるべきものと謂ふ基本的なテーゼの上にGemeinschaftのGesellschaftに對する根源性若しくは優越性を主張して居るのであります。その優越性は、彼自身の表現を籍れば「Gemeinschaftは永續的な且つ純粹な共同生活であり、Gesellschaftは唯だ一時的な皮相なそれに過ぎない。從つてGemeinschaftそのものは生ける有機體として、Gesellschaftは機械的な集合體または製作物として理解さるべきである」(ditto, S. 5.)と、斯う云ふのであります。

しかし果してさうであるかどうか。大體人間の結合關係を單なる意志關係と云ふやうな心理的な關係にのみ基礎付けることは社會の現實態に對して狹きに

失する見方でありますが、この問題は當面のGemeinschaftの概念を越えてより深く且つより廣く擴がつて居りますので、しばらく問題の外に置き、此處では單に直接テンニースの說くGemeinschaftの優越性そのものに就てその當否を考へてみたいと思ひます。そこでいまテンニースがGesellschaftの一つの根源的な形態たる契約に就て加へた說明を此處に捉らへ來たつて、考へてみますに――彼は先づ次のやうに云つて居ります。「直接取引を必要としない契約は、Kreditと云ふ名稱の示すやうに、誠實と信賴とに基いてゐるやうに思へる。この契機は、本質意志に屬し且つこれに關係するものであり、未だ發達せざる交易に於ては壓倒的に效力を持ち且つ持ち續けることの出來るものである。しかしこの契機は、徐々に打算に由つて驅逐され、置き代へられる。この打算に於ては、擔保の提供とか支拂能力の證明としての事業の見透しと云つた客觀的な根據に由つて將來の契約履行が保證されるのである。」(ditto, S. 196.)と、斯う說明して居ります。それでは誠實や信賴のやうな本質意志が如何にして打算のやうな選擇意志に變つて行くのか。又は本來Gemeinschaftたるべき契約が、如何にしてGesellschaftの一根本形態に成るの

か。テンニースはこれを唯だ事實として指摘するに止つて、その本質的關聯に就ては觸れるところが無いのであります。從つて其處には、本質意志若しくは Gemeinschaft の事實としての根源性が指摘されてゐるだけであつて、彼がその抽象的な意志論に於て取り上げたやうな本質的な根源性は指摘されてゐないのであります。では、事實としての契約そのものから、果して斯のやうな本質意志若しくは Gemeinschaft の根源性が說かれ得るかと云ふに、勿論事實として或る種の契約が、いまテンニースの指摘したやうな特質を具えてゐることには疑ひを容れないのですが、本源的な事實としてすべての契約が誠實または信賴に基くと云ふことは不幸にして人類の歷史上または社會上の事實では無いと云はなくてはなりません。テンニース自身指摘してゐるやうな「各人が自分自身の爲にのみ生活し、他の凡ての人々に對する緊張の狀態に在る」(ditto, S. 37)ことも、人間の「潛在的な敵意や鬪爭」(ditto, S. 52.)の狀態も、人類史の事實としては、誠實や信賴と共に、契約の常に新たにして同時に又常に古き契機であります。又何等かの「客觀的根據」を持つ契約も、事實としては新らしいと同時に古い人類の普遍的な經驗であります。從つて後年

フィアカントが Gesellschaft を細分して、認定關係權力關係及び鬪爭關係 (das Anerkennungs-, das Macht-und das Kampfverhältnis) に三分したのは (Vierkandt, Gesellschaftslehre, 2. Aufl., 1928. S. 248 ff.) テンニースがそれを今擧げた契約の例に明らかなやうに單に認定關係のみに認めたのから見れば、確かに數段の進歩であると云はなくてはなりません。これらの關係が、單に契約のみに止まらず、凡ゆる Gesellschaft に就て指摘され得ることは既に改めて說くまでもないでありませう。しかし斯のやうに Gesellschaft を認定關係より以外のものにも等しく根源的に認めて參りますと、Gemeinschaft の Gesellschaft に對する根源性が同時に否定されて來ることも亦、多言を要しまいと思はれます。本來人間は誠實や信賴の念を抱くと同時に、不誠實や不信や、また時には惡意や敵意をも抱くものであります。そのいづれが根源的であるかを說くことは、古き形而上學の問題でありまして、事實としてはその同位性若しくは同時性を認めなくてはなりません。從つて Gemeinschaft と Gesellschaft も、その同位性または同時性の上に立つてこそ社會的事實に對する基本的な認識の出發點たり得るものであつて、そのいづれかの根源性を主張する時は、其

處に捉えらるべき社會的事實は歪曲され、その認識は貧困化するの他はないのであります。

では、同位性若しくは同時性を具えたGemeinschaftとGesellschaftとは、如何なるものであるかと云ふに、これに就ては私は、テオドール・ガイガアに於けるテンニースのGemeinschaft論の發展的解消を此處に擧げて置きたいと思ひます。即ちガイガアはテンニースのGemeinschaft論を發展せしめて、次の三つの點でテンニースを乘越えてゐるのであります。

一　テンニースがGemeinschaftとGesellschaftとの對立といふ見地に立つて、全社會生活を、その凡ゆる形象と共に觀察したのに反して、ガイガアはこの對概念を單に社會形象の一種類たる集團(Gruppe)にのみ適用したこと。

二　從つてガイガアに在つてはこの對概念が、社會の理想型(Idealtypen)でもなければ、發展傾向でもなく、また現實的構成體の種類でもなくして、集團の形成原理となつてゐること。

三　テンニースに於てはGemeinschaftとGesellschaftとの兩概念の裡に、同時に人間的共同生活の二種類の秩序、即ちGemeinschaftに於ける本質意志的な(自然的な)秩序とGesellschaftに於ける選擇意志的な(思辨的な)秩序とが含まれてゐるのに對して、すべての秩序の現象は、ガイガアに在つては、そのGesellschaftの概念の本質を構成するものであり、即ち彼に從へばGesellschaftは、秩序の

種類の如何を問はず、秩序による結合（verbundenheit durch eine Ordnung）であること。これに對してGemeinschaftは、ガイガアに於て、人間が我等（Wir）として結合してゐる事實、卽ち本質的な人間の共在（Verschmolzensein von Menschen im Wesen）であること。（Theodor Geiger, Die Gestalten der Gesellung, 1928. S. 22—23. u. S. 21. 猶ほガイガアのテンニースに關する研究に就ては次の論文を參照。"Die Gruppe und die Kategorien Gemeinschaft und Gesellschaft" im Archiv für Sozialwissenschaften, Bd. 58. Heft 2.）

斯くてガイガアは次のやうに云つて居ります。「Gemeinschaftは、若しもそれがGesellschaftの契機に由つて補全されなかつたならば、何等の社會的現實性をも帶びない單なる一つの精神狀態、または現實化の可能性を含まない混沌たる孵化狀態たるに止まるであらう。しかしかう云つたからとて、若しもGesellschaftが先づ最初に與へられたものとしてのGemeinschaftに附け加はるものであるかのやうな印象を喚び起すとしたら、この說明は未だ表面的であり機械的である。Gesellschaftは、形式の內容に對するのと同樣の關係に於て、Gemeinschaftに對立してゐるのである。では、この兩者のいづれが先づ存在するのか。本質的な人間の共在が直ちに現象となるのでもなければ、また意味的な秩序的結合がそのまゝ現象となるの

でもない。」(ditto, S. 30—31.) と、斯う說明して居ります。

Gemeinschaft と Gesellschaft とを、その具體的な同位性若しくは同時性に於て理論的に追及して行くと、大體斯やうな結果になつて行くのは、當然の經路かと私は考へます。しかし斯やうな解釋に於ては、Gemeinschaft も Gesellschaft も最早やそれ自身で獨特な社會の構造的範疇であることは出來ず、一社會形象の構造契機的な範疇となつて、兩者は Gemeinschaft なくして Gesellschaft なく、又 Gesellschaft なくして Gemeinschaft なしと云つた相互規定的な關係に立つのであります。從つて Das Volk といふ集團をとつて考へてみましても、それはそのまゝ Volksgemeinschaft なのではなく、Das Volk に於て Volksgemeinschaft は Volksgesellschaft に由つて秩序付けられて實現されるのであり、Volksgesellschaft は Volksgemeinschaft に由つて存在の根據を與へられるのであります。しかし斯やうに解釋して參りますと、其處では Gemeinschaft と Gesellschaft との本來のドイツ的な語感は殆んど解消されて了ふのでありまして、これを別の角度から見る時は、Gemeinschaft 論は Geminschaft の優位といふドイツ的な眞實感の重壓から解放されるのでなければ、到底正當な學問上の理論

とはなることが出來ないとも云はれ得るのであります。

（序に附け加へて置きますが、斯やうにテンニースの Gemeinschaft 論に於ける Gemeinschaft の根源性が否定されて來ると、勿論その根底と成つた本質意志と選擇意志との上下的な對立關係も亦强く否定されなくてはなりません。大體生ける具體的な人間に於ては、最も單純な衝動でさへ、自我意識に由つて影響されてゐないものはなく、又思惟と云つても、そこに衝動や欲望の滲み込んでゐないものは在り得ません。本質意志も選擇意志も、決して夫夫獨自な存在を執つて上下の關係に立つものではなく、兩者はやはり同位の相互規定的な契機として人間の行動の原理を形成してゐると見做さるべきでありませう。）

以上に申述べたところを再びテンニースの理論に就て概觀してみますと――固よりテンニースが彼の Gemeinschaft と Gesellschaft との概念に於て開示した諸種の社會的事實とその性質は、社會の現實的實相に於て注目すべきものであり、そのいづれもが社會學の徹底的な研究の對象たり得るものであります。このことは、彼がその分析を總括した次の表をみても明らかでありませう。（ditto, S. 247―

248.)

A

(1) 家族生活　その社會意志＝和合。人間はその全心情をひらいて此處に生活する。その本來の主體は民族である。その主要なる業務＝家內經濟、これに對する規範は理解の中に與へられる。之に結びついた精神的主要傾向＝適意卽ち生產、創造、保存の樂しみと愛。

(2) 村落生活　その社會意志＝慣習。人間はその全感情をひらいて此處に生活する。その本來の主體は公共團體である。その主要なる業務＝農業、その共同作業の基準と方向とは慣習の中に示めされる。之に結びついた精神的主要傾向＝慣習卽ち規則的に繰返された勞働。

(3) 都市生活　その社會意志＝宗敎。人間はその全良心をひらいて此處に生活する。その本來の主體は敎會である。その主要なる業務＝藝術、その藝術的意志は信仰を通じて課題や作品に現はれる。之に結びついた精神的主要傾向＝記憶卽ち受容された敎訓、歸依した敎理、固有の觀念。

B

(1) 大都市生活　その社會意志＝約定。人間はその全努力を傾けて之を設

定する。その全努力主體は Gesellschaft そのものである。その主要なる業務――商業、これは純粋な(選擇意志的)行爲であり、契約は商業の慣習、信仰である。之に結びついた精神的主要傾向――熟慮卽ち注意、比較、打算。

(2) 國民的生活。その社會意志――政治。人間はその全打算を傾けて之を設定する。その本來の全體は國家である。その主要なる業務――工業、工場を支配するものは規約である。之に結びついた精神的主要傾向――決斷卽ち資本の合理的生産的な活用と勞働力の賣却とに對する決斷。

(3) 世界人的生活　その社會意志――輿論。人間はその全意識を傾けて之を設定する。その本來の主體は學者共和國である。その主要なる業務――學問、これは學說に於て固有の法則を樹立し、その眞理や見解を開示し、これが書物や新聞や、從つてまた輿論の中に擴がつてゆく。之に結びついた精神的主要傾向――概念。

この分折も嚴密にみれば勿論そこに幾多の疑問を殘しては居ります。しかし大體からみて、テンニースが社會的事實の上に廣く注意を拂つた功績は、そこに認

なくてはなりません。彼の犯した學問上の根本的な過誤は、これだけに蒐めた素材に對して、極めて大雜把にAの群に屬するものにGemeinschaft、Bの群に屬するものにGesellschaftといふ上位概念を與へて、これを全體的に把握し得ると考へたこと、而かもその全體的把握の重心點をGemeinschaftのGesellschaftに對する根源性に求めたことに在るのであります。しかしこの過誤は彼の體系にとつて極めて根本的なものでありますので、この過誤の修正は結局彼の體系の解消となつて、そのGemeinschaft論は、學問の分野から、彼の粗雜な觀念性若しくはドイツ的な眞實感に共感する人々の胸裡へと後退を餘儀なくされるのであります。

以上に申述べた社會の構造的範疇としてのGemeinschaftに認められる過誤は、同時にその運動的範疇としてのGemeinschaftに就ても指摘され得るのであります。テンニースは、先程引用したその分析の總括に當つて、次のやうに云つて居ります。「文化の大いなる發展の裡に二つの時代が對峙してゐる。即ちGesellschaftの時代がGemeinschaftの時代に續いてゐる」(ditto, S. 247.) これが社會の運動的範疇としてのGemeinschaft論の骨子でありますが、此處では、テンニースの社會に對して示し

た粗雜さが歴史の上に移されて居ります。多岐複雜な社會的事實を二つの範疇に吸收することが粗雜であれば、悠久な人類史を二つの範疇で區分することは、より以上に粗雜でありませう。大體 Gemeinschaft の時代と Gesellschaft の時代とを區分する時點は何處に在るのか。テンニースは Gesellschaft の時代を近世に指定してゐるやうでありますが、中世や古代が果して Gemeinschaft の時代と云ひ得るかどうか。斯やうな範疇に縛られて歴史を眺める時は、歴史の博物館は單純な黑白畫となつて了ひます。歴史の法則は、在るがまゝの歴史に全體的な眺望を與へてくれるから貴いのであつて、在るがまゝの歴史を空虛するものであつてはならぬ筈であります。然るにテンニースは、この Gemeinschaft から Gesellschaft への發展に就て、Gesellschaft は「Gemeinschaft の頽廢の法則的な過程を示す」(Studien und Kriliken, I. S. 71.) と云つたり、Gemeinschaft から Gesellschaft への過渡は「冷化の過程」(Ebenda, S. 63.) であると云つたりして居ります。即ち彼はそこに Gemeinschaft の頽廢、冷化、崩壞を指摘してゐるのでありますが、一九二二年の彼がその主著に書き加へた補遺 (ditto, S. 201.) に從ひますと、具體的には僅かに Genossenschaft 的な自助の觀念を擧げてゐ

るだけではありますが、兎に角そこにGemeinschaft再興の萠芽を認めて、資本主義的な的Gesellschaftな世界組織の自己解體の過程に於て「單なる精神に對してメシア的な希望のかけられることが少なければ少ない程」「Gemeinschaftに對する叫び」は「愈々多くの信頼を贏ち得るに到るであらう」と、斯う云つて居ります。この崩壞の蔭から突如として出現した更生の萠芽は、彼の法則的見地からみれば、理解し難いものでありませう。何故なればその見地には、未だGemeinschaftがGesellschaftの更生の法則的な過程であることは何處にも說かれてゐないからであります。しかしこのGemeinschaftの突發的再興も、GesellschaftをGemeinschaftの頽廢の法則的な過程と見做す彼の法則的見地に於てこそ救ひ難い矛盾ではありますが、Gesellschaftをさうしたものと認めた彼の觀念性からみれば、當然の歸結であつたと云へるでありませう。本來テンニースはその社會の運動法則に於けるGemeinschaftのGesellschaftに對する優位を、歷史の直接的な觀照から導き出してゐるのではありません。それは彼にとつて、歷史の、特にドイツの歷史の彼に與へた感銘であり信仰であつたのであり、この感銘若しくは信仰に、彼がその學問的基底として與へたも

のが、社會の構造的範疇としてのGemeinschaftの理論であつたのであります。從つて學問的に云へば後者の脆弱性が前者の獨立を不可能にしてゐるとも云へるのであります。言葉を代へて云へば、社會の構造的範疇としてのGemeinschaftが、前に申述べたやうに之を學問的に檢討し發展する時は、もはや社會そのものの構造的範疇であることは出來ずに、一社會形象卽ち集團の構造契機的な範疇たるに止まるといふことになりますと、實は社會の運動的範疇としてのGemeinschaftとGesellschaftとは全く無意味なものとなり、再びもとの歴史的な信仰に還元せざるを得なくなるのであります。

以上に於て洵に粗略ではありますが、テンニースのGemeinschaft論に就てその最も根本的な短所と思へるものを一應指摘し終へたことにいたします。

しかしこの短所は、ひとり創始者テンニースのそれのみに止らず、ひろくドイツに於けるGemeinschaftの概念に共通する最する根本的な缺陷であります。Gemeinschaftの概念が、學問的には、ドイツ竝にドイツの影響下に在る國々の學界にしか

根を張ることの出來なかつた理由は、此處に在ると云つていいと思ひます。また當のドイツに於てすら、一般の壓倒的な感情的支持にも拘らず、この概念がその學問的發展(特にフィアカント・ガイガア)に於てはそれ自身を解消してゐる事實も、その根本的な原因は、以上に指摘したこの概念固有の粗雜な觀念性に在るのであります。

從つてわれわれがGemeinschaftの概念を何等かの意味に使用する時は、其處にひそむドイツ的な特性――これを一般的に云へばその浪曼主義的な幻想の危險にはよくよく注意しなくてはならないのであります。Gemeinschaft的なものにのみ心を奪はれて、それを欲求するあまり、Gesellschaft的な現實を抹殺してしまふことは、實はそれ自身の具體的否定であります。さきに擧げた集團の構成原理としてのGemeinschaftとGesellschaftとに認められるやうに、GemeinschaftはGesellschaftを否定するものではなく、それ自身Gesellschaftを伴ふことなくしては存在し得ないものでありまして、異なれる若しくは舊きGemeinschaftに伴はれたGesellschaftには對立し、また之を否定することは出來ても、その否定に於てはそれ自身のGesellschaftの

發展が進められなくてはならないのであります。これを少しく具體的に云ふならば、ナチの Volksgemeinschaft に於ても、我が國の東亞共同體に於ても、それらが單に所謂自由主義的な個人主義的な Gesellschaft を否定するばかりでは、その否定に於てそれ自身までが解體されて了ふのであり、その否定に於て新しく自己の Gesellschaft を發展せしめなくては社會的に存在し得なくなるのであります。Gemeinschaft の概念そのものも亦、この具體的な微妙な關聯を徹底的にそれ自身の裡に攝取した時、初めてその完結性に近づくことが出來るのであります。